

氏 名	阿布都西庫尔 阿不都熱合曼
生 年 月 日	
本 籍	中国
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	社博甲第 97 号
学位授与の日付	平成 19 年 9 月 28 日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第 3 条第 3 項）
学位授与の題目	ウイグル民族音楽の特質に関する民俗音楽学的研究 Ethnomusicology-research on the special feature of Uighur ethnic music
論文審査委員	委員長 鏡 味 治 也 委 員 西 本 陽 一、上 田 望 神 谷 浩 夫、柘 植 洋 一

## 学位論文要旨

民族音楽学という研究領域は、今日では、それ独自の魅力を持った学問となっている。その歴史は 120 年ほどさかのぼることが出来るが、起源はおそらくもっと古いものであろう。だが、理論や方法や適用の問題に関する新たな概念を導入した研究者たちの刺激を受けて、この学問が突入大きな高まりを見せたのは、過去 50 年間のことである。その結果として、民族音楽学とは何であり、何を研究するものであるかということ、目指す目的が何であるかということをも真に理解するために、内面から探りを入れることが出来たのである。時間と共に流れ、やがて消えていく音や音楽——音楽文化、時間芸術——を、現実の科学の研究対象とし、分析し考察すること、特にそれを書きとどめ、文章化して人に正確に伝えること——これは、思ったよりずっと困難なことだ。とはいえ、人間の感性をダイレクトに表現する音や音楽について、じっくりおもしろいをめぐらし、探究しようとする試みは、私達にとってかけがえのないことがらである。なぜならば、結局、音や音楽を介在させた人間研究にはかならないからだ。民族音楽学はそうした音や音楽を人間行動の一環としてとらえ、それに考察をくわえることで、その表徴を一層鮮明にしようとする。さらに、音文化をとおして、人間、人類、民族のもつ固有の感性と心性を解明しようとする。

中国西北部辺境に位置する新疆ウイグル自治区は中国最大の省区であり、歴史上「シルクロード」の名の下に知られる東西交渉路の中心的な部分として重要な役割を担ってきた地域である。700 万以上の人口規模を持つウイグル人を主な居住者としている。ウイグル人はトルコ系の言語・文化をもち、全民族的にイスラムを信仰する民族である。彼らは、社会のあり方から言うならば、オアシス地域における定住民（農民・都市民）と、山地・草原部の遊牧民に分かれる。また、1980 年代以後の「改革・開放」路線の登場以来、経済発展が顕在化し、ウイグル人など「先住民族」社会においても「近代化」や「都市化」が進行している。このような動向と並行する形で、一部の地区では、独特なマルチ・エスニックな社会・文化的環境が形成されつつある。

日本における新疆に相当する地域に関わる研究は、第 2 次世界大戦前においては、日本の国策に沿った戦略的観点からの時事的な研究と、古い時代のいわゆる「西域」の文化や地理的考証などの研究に特化されていた感がある。第 2 次世界大戦後、人文系に限って見ても、漢文文献に基づく研究、ウイグル文書に関する研究など、部分的にはかなりの進展を見せたが、しかしながら、1970 年代までは、現地へのアプローチが極めて困難であったため、現地の実情的な状況に即した調査・研究や現地所在

の資料・遺物などに基づいた研究はまったく不十分なものであった。近年、新疆に関わる研究は、現地へのアプローチが容易となったことと連動して、著しい進展を見せている。毎年、新疆現地における調査研究がいくつも組織され、それは考古学（仏教遺跡の発掘）・歴史学（史料の共同研究）・言語学・教育学（日本との比較研究）・民族学・地理学（砂漠）・生物学・農学・医学など、広範な分野におよんでいる。最近の現地調査の隆盛は、1970年代以前ならば、想像だにできない状況である。そういう意味で、新疆研究はこの10数年間ほどの間に従来とは次元を異にする段階に入ったと言ってもよい。文化人類学・教育学・歴史学など人文系の分野においても、現地調査に依拠して一定の成果が挙げられつつある。このような趨勢は、当地域を単なる中国の辺境地域や東西交渉路の一部とするような立場ではなく、現地語の資料を利用し、当地域の主要な住民の社会・文化に主眼を置いた研究が台頭してきた、という事情と照応するものである。歴史研究においても近現代をはじめとして、当地域がイスラム化されて以後の比較的新しい時代の歴史研究が、現地語の資料に基づいて飛躍的に前進している。当地域の現在は、激しい変動のただ中にある。いわゆる「民族問題」をはじめ、様々な問題を抱える一方で、1990年代に入り、中国における改革・開放政策によって経済発展が波及しつつあるだけでなく、ソ連の解体によって独立した、新疆と隣接する中央アジア諸国との往来が活発化するなど、新疆を取り巻く状況はとくに経済面で大きなうねりを見せている。このような新しいアスペクトを背景として、本地域と日本との関わりも今後、より拡大・深化の方向に向かうことが予想される。実際、日本人の新疆への留学、逆にウイグル人などの日本への留学が盛んになりつつあるなど、双方の人的交流は瞠目すべき増大傾向にある。また、日本企業が新疆においてビジネス・チャンスを求める動きも加速しつつあるように見受けられる。このような事態の推移は、その独自の地域性に即して当地域を学際的・総体的に扱う研究分野（仮称「新疆地域学」）の創出、それを人的に支える態勢の構築、研究成果の社会との共有化、というような方向性を将来的には求めているように思われる。このような日本でのウイグル研究に対する関心が高まった中、ウイグル音楽に対する研究も必要不可欠な状態にある。民族音楽学に関しても、これからは、日本から発信を増やして、日本から責任を果たすことがさらに必要になると思う。

ウイグル音楽研究を振り返ってみると、最初は中国新疆ウイグル自治区文化庁の指導の下で、ウイグル12ムカームが整理、記譜され、1960年に出版された。その後、文化大革命の影響によってこの研究が一時期停止された。1970年の後半から、また12ムカームの研究が再開された。特にウイグル伝統音楽の楽式、リズム、メロディ、旋法、音階などの特徴、そして、ウイグル文化との関連性、歴史的な発展過程について研究されている。これらの研究はウイグル音楽の研究の貴重な資料となっている。しかし、これらの研究はウイグル12ムカーム、伝統音楽の一部についての研究に終始しており、ウイグル社会の音楽の全体を把握しようとしたときには、十分なものとは言えない。また、多くの研究では主観的な議論が多く、客観事実と異なる点が多数存在するため、様々な問題に対する議論をもっと客観的視点から広げる必要がある。

本稿では、狭い意味の音楽行動を現在の時点で調べるだけでなく、歴史的にも拡張し、また、直接的には行動に現れ難い人々の意識や認識方法までも理解しようという方向、音楽だけでなく、広い意味での人間の理解にますます大きな役割を果たすことを目指し、現在起きつつある非先進諸国の社会と音楽文化の変容を捉えるために不可欠な近代化のもたらす様々な矛盾に関する理論的アプローチと、個別的なフィールドワークによる現実把握。言い換えれば、これまで主として音楽社会学の領域において論じられてきた現代社会と音楽に関する諸問題の研究と、民族音楽学の領域で研究されてきた非西欧世界の音楽文化研究の双方からのアプローチなどを通してウイグル伝統音楽をとりまく生活の様式はどうなっているのか、その音楽の構造はどのように形成されるのか等を時間の軸に沿っていっそう具体的に検討し、「美の体系」としての音楽を考える上で、人々の意識や価値観、慣習、信仰などを各側面から分析し、人間の能力という普遍的な前提と西洋音楽の理論に基づいてそれを記譜したものではなく、それぞれの音楽のもつ特徴を音楽に現れる音を物理的、科学的な観点に立って

より具体的、客観的にウイグル伝統音楽で有する特徴を探り出す。

論文の構成としては、第一章ではウイグル語で出版されたアブドゥケリム・ラフマン他著『ウイグル族の習俗』と、新疆ウイグル自治区南西部のカシュガル市出身のウイグル族である筆者の見聞および聞き取りにもとづき、新疆ウイグル自治区在住のウイグル族の民族誌的概況を提示した。第二章ではウイグル音楽の音階や旋法やリズム特徴、伝統音楽ジャンル、楽器などウイグル音楽の基本状況を提示した。第三章では様々な資料、筆者が2003年7月に新疆ウイグル自治区の中でウイグル人が多く住む都市カシュガルで10代から60代までのウイグル人を対象に行ったアンケート結果や筆者の体験に基づいてウイグル音楽の近代化の流れを三つの時代に分類して検証を行った。第四章では、民族音楽学の歴史やウイグル音楽研究に実績を振り替えながら、メリアムやザックスなど民族音楽学者の議論の基でウイグル社会における音楽意識、ウイグル人における音楽概念や社会の音楽に対する行動などを検証した。次に、2006年11月に行ったフィールドワークによって得取材録音を基に筆者が提案する音楽の測定法を用いてラワップという楽器を中心に音の分析を行い、今までのウイグル音楽研究者が行った音の測定でかなりの問題が存在していることを具体的なデータから証明することが出来た。さらに、取材から得たウイグル人住む7つの地域に代表7つ曲を測定し、全てのウイグル音楽が固有する特徴を明確に提示した。第五章では新疆ウイグル自治区の南に位置する町アトシュに住むウイグル人家族三世代の結婚式を事例に取りあげ、2004年9月に現地で行った家族へのインタビューと筆者がそこで観察した結婚式の模様からその三世代の結婚式の模様を再構成して記述し、ウイグル人の結婚式の時代による変化とその要因を考察した。

民族音楽学は音や音楽をとおして民族や人間をしること、言い換えれば異文化を理解することである。また同時に、自文化をも理解することである。こうして異文化に適切にアプローチし、その異文化をただしくよみとり、ふかく理解することで、私たちは他人が自分とは異なる存在であること、世界がそのような様々の人々との集まりから成り立っていることに気づく。異文化理解という目標をかけながら、文化としての音と音楽を科学的に考察し探求しようとする民族音楽学において、ウイグル音楽対象に行った本研究は民族音楽学の新しい時代要請に貢献できたらいいと思う。

## Abstract

The XinJiang Uighur autonomous region located in the China northwest part frontier district is the greatest state in China, and is an area which has borne the important role as a central port of the international trade route historically known as "Silk Road." Uighur people with more than 7 million population are the dominant residents there. Uighur people are races which have the language and culture of the Turkey group and believe in Islam. They can be divided into the settlement people (a farmer and city people) in an oasis area and the nomad of Yamachi and a prairie part. Since the reopenning of the trade route after the 1980s, economic development has activized and modernization and urbanization are advancing. Uighur people also began to experience the social and cultural changes similar to those of other areas under modernization process.

This thesis describes and analyses the change and continuity of Uighur life-style in relation to the Uighur traditional music and those of the structure of the music itself. It traces the historical course of change in the social and musical background, depicts the people's consciousness, a sense of values, custom and faith on their own music, and analyses the sound structure of the Uighur music. It aims at spying out with a concrete and objective analyzing method the unique feature which Uighur traditional music has.

## 論文審査結果の要旨

本論文は、中華人民共和国新疆ウイグル自治区に住むウイグル族の民族音楽の特質を、民族音楽学的観点から解明しようとしたものである。論文は5つの章からなり、その前後に「はじめに」と結語および「おわりに」が置かれている。

「はじめに」で全体の問題設定と用語解説が示されたあと、第1章では新疆ウイグル自治区在住のウイグル族の民族誌的概況が、文献とウイグル族出身の著者の経験をもとに、地理・歴史的背景、生業、親族関係、地域社会、宗教・信仰、儀礼、祭礼に分けて記述されている。また第2章はウイグル族の継承してきた伝統音楽を、そのジャンルや使用楽器から概観している。

第3章はウイグル族の暮らす地域の音楽状況の変化を、近代音楽が到来する19世紀末から現在まで、19世紀末から中華人民共和国編入まで、編入後「改革開放」政策が実施されるまで、「改革開放」政策実施後の3つの時期に分けて検討している。その後で、著者が2003年に現地で実施したアンケート調査をもとに、その時点でのウイグル人の音楽に対する考えや嗜好を分析している。

第4章が本論文の中核であり、そこではウイグル音楽に関する研究の歴史を概観して問題点を指摘したあと、まずウイグル社会における音楽概念と音楽に対する意識を、音楽を表わす用語やそこに盛り込まれた価値観、また音楽を演奏し興じる際の身の動きや行動の分析をもとに検討している。そしてさらに、著者自身が採取したものと市販のものをあわせて、実際に演奏された音の資料を使い、コンピュータを駆使してその音階や音程の変化を詳しく測定し、ウイグル音楽固有の音階、音程、楽曲中の音程の変化に現れる特質を提示している。その音程変化の特質は漢民族の音楽や西洋クラシック音楽のそれと比べられ、グラフ上で明らかに違うパターンが見られることを明示している。

第5章はそうしたウイグル民族音楽が演奏される重要な場面である、結婚式の模様を、ある家族の親子3代の結婚式の事例から描き出している。これは著者が現地で行った聞き取り調査をもとにしており、時代による社会状況の変化にともなう儀式形態や音楽の演奏形態の変化と、それにもかかわらず音楽がいぜん重要な役割を果たしていることを示している。

こうした検討を経て、結語では本論文の課題を、ウイグル社会における音楽の近代化の経緯と音楽状況の変化の記述、ウイグル族の音楽に対する意識とそれに関する社会的行動の検討、音楽の新たな測定法の提案とそれによるウイグル伝統音楽の音階・旋法構造の分析の3つに整理し、本論文で明らかにしたことを整理しまとめて結びとしている。

論文全体の構成については、章ごとの独立性が比較的高いために、とくに3章と4章、および3・4章と5章のあいだで、もう少しそれぞれの章で扱ったデータや分析結果を相互に参照して考察する議論が欲しかった不満が残るが、民族音楽をその民族の置かれた社会的状況の中に置いて検討するという点ではバランスのとれた構成になっている。

また使われたデータやその扱いの適切性については、聞き取り資料、採取音源、市販の音源など、いずれもさらに事例を増やせばより説得力が増したと思われるが、本論での著者の主張を導き出す上ではまずじゅうぶなものと言える。

本論のいちばんの独創性は、楽曲の音構造の分析手法の提示と、それを使った各種音楽の旋法構造（音程変化）の分析にある。それによって示されたウイグル音楽、漢民族の音楽、西洋クラシック音楽の分析グラフは、ひと目でその違いが認識でき、その比較から少なくともウイグル音楽固有の特質が明瞭に図示されていることを認めざるを得ない。この手法を使って今後、ウイグル音楽の中での過去から現在までの曲の比較、地方的な違いの検証、隣接するインド音楽やアラビア音楽、トルコ音楽等との比較研究が期待される。

その反面、不満が残る点としては、そうしてグラフで提示された旋法構造（音程変化）に見る特質が、ウイグル音楽全体の中で音楽的にどういう位置づけにあるのか、またその構造で示されたパターンがウイグル人のあいだでどう評価され、いつどのような具体的場面で現出しているのかについての

議論や記述が弱いことである。音楽には旋法（音程変化）のほかにもリズムやテンポ、音色などさまざまな要素がある。それらについても分析し比較検討した上で、旋法（音程変化）にいちばん固有性が現れると論じてくれば、そこにウイグル音楽の特質を見ようとする著者の主張の説得性がさらに増すだろう。またそうして取り出した特徴ある旋法（音程変化）が、結婚式などの場面でどのような効果をもたらし、人びとをどういう気持ちに駆り立てるのかをより詳細に記述分析してくれば、音楽分析と民族誌的記述がより有機的に統合され、より「民族音楽的」な研究になっただろう。

以上の不満は著者の主張や結論を否定するものではなく、それをより説得力あるものに展開していくための示唆であり期待である。著者が提示した旋法（音程変化）の分析手法は多様な音源に適用でき、音楽の比較研究の有力な武器となる可能性を秘めている。本論文はその端緒を具体的な事例分析によって提示したものと評価し、審査委員一同学位授与にふさわしいものと判定した。

なお、目次や参考文献リスト、また引用表記の点で一部に不備が見られるので、製本の際には修正の必要があることを明記しておく。